

登場人物

良 夫・・・夫（五十五歳） 実は家族を亡くし、天涯孤独  
美智子・・・妻（四十五歳） 実はバイトで疑似家族  
芽 衣・・・娘（十五歳） 実はバイトで疑似家族

時代は、近未来。（だいたい2024年）

金沢市にある市営住宅の一室。

居間のようにであり、家具も何もない部屋の真ん中にこたつ。小型のIHヒーターとその上に土鍋がのっている。

人の気配はまだない。

そこへ良夫が入ってくる。

（すこしの間。セリフは、ここから芽衣の「もつと聞きたかった」まで一本調子で。）

良夫 おつ、今日は鍋か。久しぶりだなあ。おーい、母さん、私のメガネ知らないか？

美智子（声だけ）お父さん、またですか？携帯のように音が鳴ればいいのよね。

良夫（独り言）携帯とセットになったメガネか。そりゃ便利だな。

美智子（声だけ）携帯メガネなーんてね、いいかも。

良夫 ありゃ、聞こえたか？

良夫、こたつの真ん中に座る。

美智子を取り皿とお箸をお盆にのせて入ってくる。良夫の隣に座る。鍋の下のIHヒーターの電源を入れる。（どことなく二人はぎこちない。）

美智子 まったく心当たりないんですか？

良夫 なあに、そのうち出てくるさ。

美智子 だといいですけど。目玉に足のついた妖怪もいるらしいし。勝手に歩いていっ

たんじゃあ・・・。

良夫 そりゃ、目玉おやじだよ。めがねじゃない。

そこへ娘の芽衣が入ってきて、良夫を真ん中に母と向き合って、こたつに座る。

芽衣 ちよつと、トイレの窓にあったよ、メガネ。おつ鍋だ！やったあ！

良夫（メガネ受け取り）あー、助かったよ。何にも見えなくて。

芽衣 お父さん、もう何回目？

良夫 いやいやいや。（口癖のように）

芽衣 洗面所、玄関の棚の上、それから・・・

美智子 芽衣、その辺で・・・。

芽衣 そのうち目玉焼きの上にめがね、置いたりしてさあ。  
美智子 そうね。

良夫 うーん、女子二人にはかなわんね。いやはや。

美智子 そういえば、うふふふ。(思い出し笑い、のような)

良夫 何だ？

美智子 ほら、能登のえーとなんでしったつけ？よく行った温泉。えーと。

美智子 つまりそうになり、土鍋を見る。

良夫 (助け船を出すように)あつ、縄文真脇温泉。

美智子 そう、そこへ行った時、

良夫 ああ、あの頃はよく車で行ったなあ。

美智子 温泉に入って帰ってくる途中だったかしら？お父さんたら、もう金沢って時に「財

布と着替えた下着置いてきた」って。あの後大変でしたもんね。

芽衣 えーっ、その話初耳、それでどうしたの？

美智子 もちろん、すぐ電話して取りに戻ったわよ、片道3時間なのに。

芽衣 えーっ往復6時間！

良夫 いやいやいや、その話やめようよ、母さん。

美智子 それで温泉に戻ったら、ちゃんと財布も荷物も届けてあったの、受付に。

芽衣 良かったね。

美智子 そしたら、お父さん、その時なんて言ったと思う。

芽衣 うーん？

美智子 「母さん、せっかくだからひとつ風呂浴びようか」って。

芽衣 えっ？

良夫 いやいやいや、だって疲れをとるために、そりや入るだろ。

美智子 私は大変疲れました。

芽衣 お父さん、昔っからそそっかしいんだ。

美智子 あっあとね・・・

良夫 あー、もうその話やめ、やめだ。

芽衣 えー、もっと聞きたかった。

ちよっと間

(三人、少しだけ慣れてきて、会話が少しだけ自然になる。)

良夫 芽衣、近頃学校の方はどうなんだ？

芽衣 えっ？

美智子 あー、担任の梅津先生が結婚なさったんですって。

良夫 ほう。最近？

美智子 一月前に。

芽衣 それで、学校でも時々奥さんの話ばかりするんだよね。

良夫 のろけ話か？けしからんな。

美智子 それがね、結婚した次の夜、梅津先生が冷蔵庫を開けたら、中にネズミの死骸が入っていたんですって。

良夫 な、なんだ、そりゃあ。

芽衣 先生の奥さんのペットのえさ。

良夫 えーっ、先生の奥さん、何を飼っているんだ？

芽衣 蛇、それに、モモンガ、蜘蛛、カメムシ。

良夫 カメムシ？

芽衣 あっ、間違えた。カメレオン。

良夫 いやいやいや、ちよっと待ってくれ、その、蛇のか？

芽衣 お父さん、よくわかったね。

美智子 先生も、は虫類っぽいわよね。

芽衣 うん、だから結婚、できたのかもねって、みんな言ってる。

美智子 あだ名が「スネークすね男」

芽衣 短くして、「スネスネ」だよ。

良夫 えーっ、そんな名前つけられたら、そりゃ先生すねるなあ。(すねた顔)

美智子と芽衣、良夫を見て、クスツと笑う。

美智子 そうだ、芽衣。外に出るときはマスクしなさいね。

芽衣 えっ、ちゃんとしてるよ。

美智子 雨にも気をつけないと。

芽衣 わかっている！言われなくても、ちゃんとやってるから。

良夫 昔と違って何が降ってくるか、わからないからな。

芽衣 それより、お父さん、能登にまた行きたいなあ。

良夫 そうだなあ、景色はいいし、昔は車のままで走れる海岸もあったんだぞ。

芽衣 ああ、聞いたことある。

良夫 砂浜になあ、浜焼きの食べられる店がいくつも並んでいてなあ。

美智子 そうだった。時々行ったわね。ハマグリにアサリ、焼きおにぎり。

良夫 おー、焼きいか、しょうゆで照り焼き。

芽衣 食べたいな。ずるい、また二人だけで。

美智子 あら、芽衣ちゃんの小さい時に、そこへ海水浴とか行ったのよ。今はもう、プールでしか泳げなくなっちゃったけど。

芽衣 覚えてる、覚えてる。お母さんの平泳ぎ面白かった。

良夫 面白い？

芽衣 髪の毛がカッパみたいで、葉っぱの模様の、緑の水着で。

美智子 ちよっと、なんであなた、そんなこと覚えているの！

芽衣 え？

美智子 だってあなた、まだ2つだったわよ。

芽衣 覚えてるよ、「平泳ぎなんて、へのかっぱよ」って言ってた、お母さん。

良夫 (笑いながら) ははは、ははは。そうだったな。

少し間、みんななぜか鍋を見ている。

芽衣 早く煮えないかな。

美智子 この待つ時間がいいのよ。

芽衣 なんか、ワクワクするよね、鍋の中、今どうなっているんだろうって。

良夫 やっぱ、団らんは鍋に限るなあ。

美智子 これ一つで、みんな幸せな気持ちになれるわね。

芽衣 でもさ、鍋もいいけど、ご飯も食べたいなあ。

美智子 芽衣。

良夫 そうだな、鍋もいいけど、寿司なんかも良かったかなあ。

美智子 握り寿司といえど、甘エビですかね、やっぱり。

良夫 そりゃ母さん、北陸は、かにだよ。しゃりの上にかにの身、乗ったやつ。軍艦巻きで。

芽衣 お父さんて、何でもかになんだね。

良夫 その次は、太巻きだね。

芽衣 えっ、太巻き？

良夫 あー、ロマンだよ。太巻きって。

美智子 ロマンですか？

良夫 黒いのりの堀に守られて、白い花壇の中に咲く、かんぴようと紅シヨウガとキユウリと玉子の、茶、赤、緑、黄色の花が並んでるんだよ。ロマンだろう。

美智子 そうね。昭和ってかんじよね。

芽衣 ええ！昭和な感じって何、何？

美智子 私はねえ、えっと・・・。ええっと。

美智子、また、土鍋を見る。

良夫 あっ、母さん、もうアドリブでいいから。

美智子 あっ、はい。えーとミルクセーキかな。

芽衣 ミルクセーキ？

美智子 小さい時は、うちは貧乏でね。母が私と弟に、卵の黄身と、牛乳と、砂糖だけをミキサーして作ってくれたの。

良夫 ほう、いいね。

美智子 時々、氷も入れてミキサーして、ミキサーが動かなくなったこともあったけど。

芽衣 それって、スムージーじゃん。

美智子 その味が大人になっても忘れられなくてね。喫茶店で注文するけど、二度と同じ味には出会えなかったわ。

芽衣 たまに作ってくれたよね、私の小さい時。

美智子 でも、昔みたいに卵も、牛乳もおいしくないの。芽衣の小さい頃はまだ簡単に買

えたけどね、今は・・・。

良夫 近頃は、3、4年前の東京オリンピックのおかげで、交通は便利になったけど、肝心の食べ物がまずいな。

美智子 本当に。それに比べて昭和はよかったわ。

芽衣 昭和、昭和って、自分たちばかりで。

良夫 芽衣は見たことないかもしれないが、祭りの時なんか、露天のお店がズラッと並んでなあ。

芽衣 いいなあ、ずるいなあ。

良夫 すごい人混みでな、その道、歩いているとな、あちこちから、いいにおいがするんだ。そこで食べたたこ焼き、いやあ、とろつとろつでうまかったなあ。

美智子 お祭り、いいわね。私の家では作ってなかったんだけど、柿の葉寿司をね、近所からいくつもいただくの。

良夫 柿の葉寿司かあ。

美智子 そのお家によって、具も味も違って、面白かったわ。

芽衣 (生唾のんで) どう、面白いの？

美智子 具がね、シーラってお魚だったり、油揚げだったり、大きかったり、小さかったり。

芽衣 うー、お腹すいたよー！寿司イー！回転寿司でいいからあ。

良夫 回転寿司かあ。魚が食べたいよ。

美智子 本当に。

良夫、ふと思いついたように、

良夫 あつ、母さん、ぼん酢がないよ。

美智子 えっ、えーと。(困っている)

良夫 すみません。ホントにボン酢がないので、とってきてもらってもいいですか？

美智子 ああ、はい。わかりました、とって来ますね。

美智子立って、台所へ取りに行く。

良夫 あっそうだ。芽衣、例のオプシオン頼むぞ。

芽衣 もち、大丈夫。ねえ、お父さん、娘さんって私くらい？

良夫 ああ、生きていたら、芽衣くらいの年かな。

芽衣 そっか。

と、美智子が戻ってきて、

美智子 すいませーん。ボン酢、どの棚ですかね？ あれ、なんですか？二人でこそこそと。

良夫 あっいや。

芽衣 へへへ、作戦会議！

美智子 なになに？作戦って。

芽衣 お母さん、ポン酢、ポン酢。

美智子 もー、お父さん、どこにあります？

良夫 あー、ダンボールの中だった。箱の横に「茶碗・調味料」って書いてあるんで。

美智子 はい、はい。

美智子再び取りに行く。

芽衣 お父さん、オプシヨン、アドリブでもいい？

良夫 ああ、（芽衣の好きなように）

と、美智子息を切らせて、すぐに戻ってくる。

美智子 はい、ポン酢。

良夫 おつ、母さん早いね。

美智子 （ハアハアしながら）娘と二人じゃ心配で。

良夫 娘と二人って？

美智子 あ、あの仲が良すぎるのも、心配で、

芽衣 優花んちも、お父さんにとっても仲がいいの。

良夫 優花？

美智子 ああ、同級生、芽衣の。

芽衣 そうそう、今でもお父さんとお風呂に入っているって噂よ。

良夫・美智子 えー！

芽衣 あつ、噂、噂。それくらい仲いいってこと。優花さあ、あったまいいの。テストでさ、97点も取ってるのに、悔しがって一人で落ち込んでるの。「私、どうしたらいいの」って相談してくるんだけど、しょっちゅうなんで、むっちゃ、めんどくさー。

美智子 芽衣！（言い過ぎよ）

芽衣 だって、私なんて65点なのに、どうして相談に乗らなきゃいけないの？

美智子 大事なお友達でしょ。

良夫 そうだなあ。

そのうち、ぐつぐつと鍋が音をたてる。美智子、鍋のふたをあける。

美智子 そろそろですかに？なんちゃって。

シーンとする。その沈黙に耐えられず、

芽衣 わー、かにかにっつ。あれ？かにかがない。おかあさん、かには？

美智子 ごめんごめん。かにか手に入らないから、かんにんね。かんにん鍋、かにか鍋ならんて。

一瞬微妙な間。素に戻る美智子。

美智子 ご、ごめんなさい。うまく言えなくて。

良夫 うちのやつも、まあ、そんな程度でしたから。

美智子 はあ、なんだ、そうか。

良夫 (美智子を助けようとわざとらしく) そうか、かにか入っていないのか。そうだよなあ。今時かになんて食べられる訳がないものなあ。

美智子 ほんと、ごめんなさい。

良夫 いやいやいや、母さんのせいじゃないよ。

芽衣 ふー、かんにん鍋って、つままないこといってんじゃないよ。しかも私の嫌いな

白菜ばっか。

美智子 あっ。

芽衣 ばっかっていうか、白菜しかないじゃん！

良夫 えっ、芽衣、だめなのかあ、白菜。しまったあー！

芽衣 私が白菜食べると、2, 3日頭痛して、動けなくなるって知ってての嫌み？

美智子 ちよっと、やめてよ。

芽衣 嫌み鍋って言いたいわけ？

良夫 闇鍋か？

芽衣 ちよっと、お母さん、近頃手を抜きすぎなんじゃない？

美智子 芽衣、何のことよ。

芽衣 この間からお弁当の中、ご飯と梅干しとゆで卵だけって、

美智子 だから、もう食品を手に入れるの大変なのよ。スーパーに行っても何も品物ないのよ。

芽衣 そう言えば、私が何も言えないって、思ってるんじゃない。

美智子 何よ、いやにからむわね。

芽衣 そっちこそ、何つままないこと言ってるの。ポチおかしいし。

美智子 ポチって、

芽衣 ポチ真剣にやってよ。

美智子 芽衣ちゃん、ごめんなさい。だって魚貝はもう手に入らないのよ。

芽衣 じゃあ、肉、肉は？

美智子 だから、もう海の方は食べられなくなったから、肉は高くなりすぎて買えないのよ。

芽衣 かにか鍋だっつうから、早めに帰ってきたのに。こんなポチ野菜、しかも白菜だけじゃないの。

美智子 この白菜だっつてね、スーパーをハシゴしてやっと探したのよ。わかってちょうだい。

芽衣 うざ！

良夫 何だ、その言い方は！

芽衣 ……

良夫 お母さんに謝りなさい！

芽衣 ……

良夫 何も材料がない中で、やっと作ってくれたんだ。

芽衣 ポチ親父むかつくし。ポチやってられねーし。

良夫 だから、何だ、その口の利き方は！

芽衣 ふん！

良夫 おまえって奴は！

芽衣 ポチ最低！こんな親！

良夫 なんだとおー！

芽衣 こんな家、もういや、出てく！

出て行こうとする芽衣の前に良夫が立ちはだかり、今にも芽衣に手を上げたその時、間に  
入る美智子。

美智子 やめて、二人ともやめなさい。何やっているの、こんな大事な時間に。

芽衣 はい、親子ケンカおしまーい。

良夫 あー、どきどきした。芽衣、なかなか迫真の演技だったよ。

美智子 えっ？

芽衣 本当にたたかれるかと思った、こわかった。

良夫 ごめんごめん。

美智子 あっ、さっきの…。

良夫 とにかく、白菜だけでも食べようか。せつかくのかに鍋なんだからなあ。

と、鍋に手を出そうとしたとき、美智子の携帯電話から呼び出し音が鳴る。

美智子 はい、もしもし。はい、はい。わかりました。ええ、後5分ですね。

芽衣 おかあさん…。

良夫 そうか、後5分か。

美智子 あっ、延長なさいますか？

良夫 えっ？

美智子 延長です。今なら20分延長できます。

良夫 うーん、昔カラオケで聞いたような…。いや、きりがなくなるので、このま  
までいいです。

美智子 はい。(電話に) 延長はありません。では、よろしく。

美智子 携帯電話を置く。

美智子 あっ、すいません。あと5分、続けますね。芽衣。

芽衣 うん。

良夫 いや、あの、もし良かったら、うそでなく本当で話してもいいですか？

美智子 えっ、前もっていただいている台本では、この後、鍋の具を想像して、「三文字しりとり」を楽しくすることになってますけど。

良夫 すいません、さつきから気になって気になって、しょうがないことが。

美智子 え？なんですか？

良夫 芽衣、あのポチってなんだい？

美智子 ああ、ポチね。十何年前は、ガチとかマジとか言ってたみたいだけど、今の女子学生はポチというそうですよ。

良夫 そうか。なんかポチポチ言うのがかわいくて、喧嘩にならなかったよ。

芽衣 そうなんだ。なんか、久しぶりにお父さんにしかられて、懐かしかったよ。ありがと、おじさん。

良夫 ……お父さんか。

美智子 私も夫に久しぶりに再会してみたみたいで、楽しかったです。よろしかったらまた家族システム、利用してください。

芽衣 また、お母さんと来るよ。

良夫 いやあ、これが最後になるだろうな。

美智子 あっ、お仕事で遠くに行くんですかね。

良夫 ああ、当分は帰って来れないだろうしな。

芽衣 お仕事って？

良夫 自分から志願したんだ。60歳になる前に。

美智子 60歳からは強制でしたね？三年間の作業でしたか。

良夫 肝心な時に、人がいないんだ。仕方ないかな。

美智子 山田さん。

良夫 もう一度、食べ物がおいしかったところに戻れたらな。

美智子 せっかく前もって台本まで頂いていたのに、へたくそでごめんなさい。

良夫 いやいやいや。うちのも、アンチョビをアンチョビひげとかシリアルをシリアスっていう程度ですからね。

美智子 そうですか。

芽衣 「言葉に詰まったら、土鍋を見る」ってあったけど、私は大丈夫だったよ。

美智子 ははは、二度ばかり。

良夫 自然体で、よかったですよ。

美智子 そうですか？

良夫 家族システムのメニューの中に、プロの女優さんもありましたよね。

美智子 ええ。

良夫 もちろん高額で払えないのもあったけど、普通の方をお願いして良かった。

美智子 そう言ってもらえると、うれしいです。

良夫 さつき芽衣ちゃんと喧嘩ごっこして、つくづく思ったよ。

芽衣 えっ？

良夫 こういふ家族の日々をなくしたくないなど。だから、なおのこと、いかなくは

なあ。

少し間。

美智子 山田さん、みんな、あの日がなければ、と思っています。

良夫 もうすぐ家族システムからお迎えが来るんだろう。

美智子 はい。

良夫 ありがとう。

「ピンポン」ドアチャイムがなる。

美智子 それでは、山田良夫様のご注文、家族ごっこ、鍋を囲む団らんコース、オプショ  
ン付き、終了します。ありがとうございます。

芽衣 おじさん、必ず帰ってきてね。

良夫 芽衣・ちゃん。

二人去る。

良夫一人残る。こたつの真ん中に座る。  
鍋がぐつぐつ煮えている。

良夫 なんだ、結局「かに鍋」食べていかなかったなあ。

良夫、鍋のふたをあける。

メガネが曇る。メガネを拭くため、はずそうとする。

その時、見えにくい良夫の回りに、人の気配がする。

それは、なつかしく、そして暖かい。

さっきの二人のようで、別人のようでもある。

曇ったメガネのままの良夫の傍らに立っている。

そして、まるで、本当の家族と会話していた頃のように、会話が始まる。

良夫 おっ、今日は鍋か。久しぶりだなあ。おい、母さん、私のメガネ知らないか？

美智子 お父さん、またですか？携帯のように音が鳴ればいいのにね。

良夫 (独り言) 携帯とセットになったメガネか。そりゃ便利だな。

美智子 携帯メガネなんてね、いいかも。

良夫 ありや、聞こえたか？

美智子 まったく心当たりないんですか？

良夫 なあに、そのうち出てくるさ。

美智子 だといいですけど。目玉に足のついた妖怪もいるらしいし。勝手に歩いていっ  
たんじゃあ・・・。

良夫 そりゃ、目玉おやじだよ。めがねじゃない。

芽衣 ちよつと、トイレの窓にあつたよ、メガネ。おっ鍋だ！やったあ！

良夫 あー、助かったよ。近くの物が何にも見えなくて。

芽衣 お父さん、もう何回目？

良夫 いやいやいや。（口癖のように）

芽衣 洗面所、玄関の棚の上、それから・・・

美智子 芽衣、その辺で・・・

芽衣 そのうち目玉焼きの上にめがね、置いたりしてさあ。

美智子 そうね。

良夫 うーん、女子二人にはかなわんね。いやはや。

良夫の妻 お父さん、今夜だけ、そばにいますから。

良夫の娘 お父さん、いっしょに鍋食べようね。

良夫 ああ、家族水入らずの団らんだね。

ゆっくりと暗転。

幕

